

栃木県埋蔵文化財 センターだより

発行 平成22年11月12日
栃木県教育委員会
宇都宮市埜田1-1-20
TEL 028-623-3425
編集 (財)とちぎ生涯学習文化財団
埋蔵文化財センター
下野市紫474
TEL 0285-44-8441
FAX 0285-44-8445
URL <http://www.maibun.or.jp>

2010
11月
やま
かいで
う



CONTENTS

- 市町教育委員会が実施する発掘調査・整理作業から
- ・寺平遺跡（市貝町）・三ツ木西和久遺跡（那須烏山市）
- ・岡本城跡（宇都宮市）
- 埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から
- ・助五郎内遺跡（市貝町）・平出城跡（宇都宮市）
- 特集 不思議な文様“縄文”の謎
- 埋蔵文化財活用のための基礎講座
- 埋蔵文化財担当者保存処理研修会
- ロビー展示から

市町教育委員会が実施する発掘調査・整理作業から

1. 寺平遺跡（市貝町）－大型^{たてあな}竪穴住居跡と出土した^{すえき}須恵器－

寺平遺跡は、小貝川をのぞむ台地上に位置する旧石器時代から中世にかけての大規模な遺跡です。平成15～16年に発掘調査が行われ、大型^{たてあな}竪穴住居跡を中心として^{ほったてばしら}掘立柱建物跡を「コ」の字形に配置した奈良・平安時代の建物群が確認され話題となりました。

掘立柱建物群の内側からは、3軒の大型^{たてあな}竪穴住居跡が出土していますが、今回はその中で最大の16号住居跡と出土遺物について紹介します。東西10.8m、南北7.8mの規模で、8本の主柱によって支えられ、2つの大きなカマドを持ちます。床面付近からは、^{すすり}硯や^{つき}坏などの多くの^{すえき}須恵器が出土しました。①は^{きやくぶ}脚部を欠損する^{えんめんけん}円面硯で、表側には黒墨、裏側には朱墨が認められました。②・③は、食器に用いられた^{すえき}須恵器の坏です。他の住居跡では、益子窯産の^{すえき}須恵器が主体的に出土していますが、この住居跡では、粘土に雲母や石英を多く含んだ茨城県新治窯産の坏が多いのが特徴的です。

現在は、整理作業を行っています。報告書作成にあたっては、^{たてあな}竪穴住居跡と^{ほったてばしら}掘立柱建物跡の関係や、集落全体の性格を明らかにできればと考えています。

(市貝町教育委員会 0285-68-4380)



① 円面硯



② 益子窯産の須恵器



③ 茨城県新治窯産の須恵器坏



大型竪穴住居跡（南から）

2. ^{みつぎにしわく}三ツ木西和久遺跡の発掘調査（那須烏山市）

三ツ木西和久遺跡は、那須烏山市東部にあたり、烏山城跡の南東約 2.5 km に位置する那珂川左岸の河岸段丘上で確認されました。

今回は民間開発に伴う発掘調査であり、調査地点は、以前から多量の縄文土器片や石器片が散布していることが知られていました。

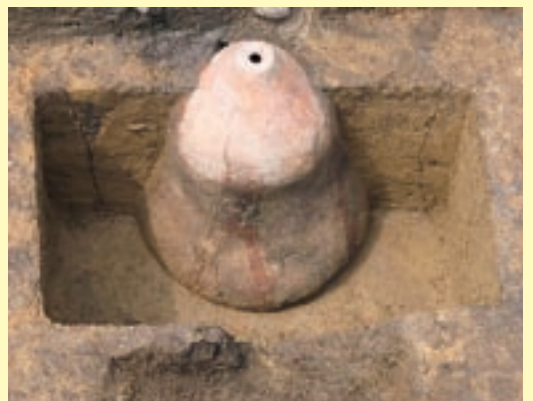
調査の結果、縄文時代中期後半の竪穴住居跡 3 軒、平安時代（9 世紀頃）の竪穴住居跡 1 軒、中世の地下式壙 1 基、中世から近世と思われる平面が長方形の土坑などが発見されました。

縄文時代の竪穴住居跡には、河原石を四角に並べて炉とした方形の石囲い炉が確認されたものもあります。また高さ約 70cm の土器が口を下に伏せた状態で埋められた伏甕が、ほぼ完形で確認されました。平安時代の竪穴住居跡は東側にカマドが作られており、カマドの周辺からは坏など土師器片も発見されました。地下式壙は天井部分が崩落した状態でしたが、出入口部分は河原石が詰められていたことがわかりました。詳細につきましては、整理作業の成果を待ちたいと思います。

（那須烏山市教育委員会 0287-88-6223）



方形の石囲い炉



伏甕

3. ^{おかもとじょうあと}岡本城跡の第 II 次確認調査（宇都宮市）

岡本城跡は、宇都宮市中岡本町城ノ内に所在する中世の^{ひらやまじろ}平山城です。昨年度に引き続き、城跡の現況把握と範囲確認のための調査を行いました。

今回の調査では次の 4 点が判明しました。①主郭の^{しゆかく}虎口部分で^{こぐち}貼石状の遺構が確認できました。この部分は、門の東脇に当たります。土塁を盛土した後に石を^ふ葺いたような状態で、一見すると、古墳の^{ふみいし}葺石のようにも見えます。石垣や石積と違って角度が緩いことから、門の周辺の装飾性を高める役割のものではないかと想定されます。②主郭の北崖周辺を調査した結果、土塁の下から一段階古い時期の堀が数条確認できました。このことから、主郭部分が何度か造り変えられていることがわかりました。

③昨年度の調査で見つかった二の堀の東側部分が確認できました。埋土の状況や地元の方の話から、近年土塁を崩し埋め戻されたことがわかりました。④出土したかわらけの中には 15 世紀後半と考えられるものもあり、この城がその時期まで遡る可能性があります。

以上の調査結果から、この城は改修工事が数回行われ、最終的に深い堀と土塁をもつ本格的な戦国期の城になったことがわかりました。

（宇都宮市教育委員会 028-632-2764）



虎口土塁貼石状況（北から）

埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から

4. 助五郎内遺跡の発掘調査（市貝町）

市貝町文谷に所在する助五郎内遺跡は、南那須丘陵の南西緩斜面上に位置します。遺跡の西側には小貝川が南流し、流域沿いの丘陵やその緩斜面に仁王地遺跡や前原遺跡、昨年度調査された北ノ内遺跡などが点在します。

発掘調査は農地整備事業の着工に先立って実施されました。古墳時代後期から古代にかけての竪穴住居跡49軒、掘立柱建物跡2棟などを確認しましたが、発掘調査除外域を加えると、大規模な集落跡であったと推定されます。

出土遺物は土師器・須恵器が主体になりますが、これらに混じって、大型の土製紡錘車が出土しました。長径11 cm、厚3.5 cmを測るこの紡錘車は、小貝川に近い竪穴住居跡の床面で確認されました。紡錘車は、綿布用の糸を撚るために用いられたとされますが、出土した大型の紡錘車においては、魚網用の太い糸を紡いだり、或いは紡錘以外の用途（穿孔や発火などに用いる工具用の錘）も併せて考えられます。

当遺跡の発掘調査によって、小貝川流域の大規模集落が新たに1例加わることになりました。



竪穴住居跡カマド周辺遺物出土状況



大型紡錘車出土状況

5. 平出城跡の発掘調査（宇都宮市）

昨年度に引き続き、城館の外堀と外堀に接する外の範囲を調査しました。

外堀の調査は、推定東門付近の外堀を真っ直ぐ北に延ばした部分に当たるため、そのまま直進して現在の用水堀の位置に接続すると見られていました。前回もお話ししましたが、平出城跡を区画する外堀の北半分は、現在の用水堀と同じ位置にあるのです。

ところが、堀は西（内側）に直角に曲がり、更に北へ90度、そして東（外側）に折れ、内側に凹むことが明らかになりました。この凹む部分には特段の施設も無く、城の内部には曲輪を区画する浅い溝があるだけでした。城の防備上、凹みは弱点になると思われるのですが、なんともはや、「史実」は小説より奇なりです。外堀の外は、平出城のあった時代には何も無く、江戸時代から利用されたようです。



凹む外堀（西北から）



平出城跡航空写真

赤線内が今回の調査範囲。黄色実線が外堀、黄色点線が推定外堀のライン。写真の上が北です。

特集 不思議な文様“縄文”の謎

皆さんは縄文土器というと、粘土紐を渦巻きのように貼りつけ、篋や棒で文様を描いた「派手に飾られた土器」(写真1)を思い浮かべることでしょう。でも良く目をこらしてみると、土器の表面には細かな粒のような文様が規則正しく並んでいることに気づきます。実はそれこそが土器の呼び名にもなった「縄文」なのです。

【縄文土器とは?】

今から約13,000年から2,400年前の縄文時代に使われたの素焼き土器で、今のところ世界最古と考えられています。日本で最も古い土器は文様が無く、その後も大豆のような粘土粒や細い紐を貼り付けた土器が作られました。縄文を付けるようになるのは1万年前頃からです。

縄文人は、主に竪穴住居に住み、木の实や果実を採集し、狩りや魚捕りをして生活していました。縄文土器は、動植物を煮たり、水を貯めるために使われていましたが、土器に付いたお焦げを調べると、おもにトチ・ドングリなどの木の实を煮て、アク抜きするために使われたことが分かっています。



アップでよく見ると



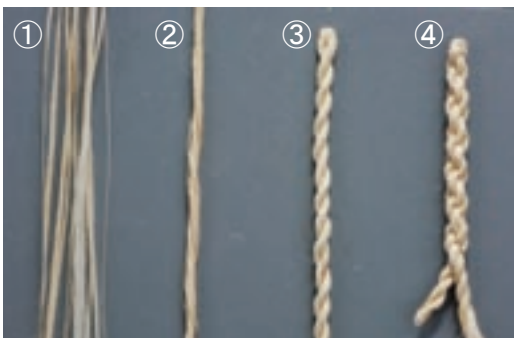
これが縄で付けた文様(復元)



約4,500年前 1

【縄文原体の作り方】

植物の繊維(①)に撚りを加えると、こより(②)になりますが、このままではバラバラにほどけてしまいます。それを二つ折りにして、もう一度撚るとほどけない紐(③)になります。日常生活で使う紐や糸はこれで十分です。このまま転がしても縄文は付きますが、さらに二つ折りにして撚ると、粒のはっきりした縄文(④)になります。つまり④の縄文原体は、文様を付けるためだけに作られた専用の道具なのです。



繊維 こより(0段) 1段の縄 2段の縄

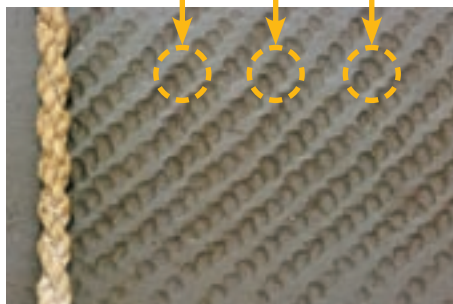
【縄文はどうやって付けたの? - 忘れられた縄文の再発見 -】

はじめ縄文は敷物や編み物を押し当てた痕と考えられていますが、今から約80年前、山内清男博士は撚り紐(縄)を回転させて付けたことを発見しました。博士は、全国各地の縄文土器を徹底的に調べ、実際に下のような縄(縄文原体という)の模型を作り、膨大な種類の縄文を解明しました。

同じ形の縄文の粒(節という)が繰り返り現れているのがわかります。



③を横に回転(無節縄文)



④を横に回転(単節縄文)



③を棒に巻き横に回転(撚糸文)

【縄文のいろいろ】

写真2・3は約6,000年前の土器です。この時期は、最も多くの種類の縄が使われました。この頃までに縄文時代に使われるほとんどの種類の縄が出そろったと言われています。

土器全面を覆う一見複雑な縄文も、撚りを加える方向や、文様の付け方をマスターすれば、意外なほど簡単に復元できます。



ループ文 小さな環が並んだような文様



約6,000年前

2



組紐が付いた土器



復元した組紐を横に回転

写真3は写真2よりもさらに難しそうですが、これは“組紐”^{くみひも}とって、細い縄を4ツ編みしたものです。縄文時代を通じてこの時期にしか使わない縄です。

写真4の土器には、縄を棒に巻き付け転がした“撚糸文”^{よりいともん}が付いています。この土器は細めの棒に縄を左巻きしたあと、さらに重ねて右巻きしています。縄の重なった部分が少し出っ張るので、そこだけ文様が深くなっています。網の目のように見えることから網目状撚糸文^{あみめじょうよりいともん}と呼ばれています。



縦に回転しています。



約2,500年前

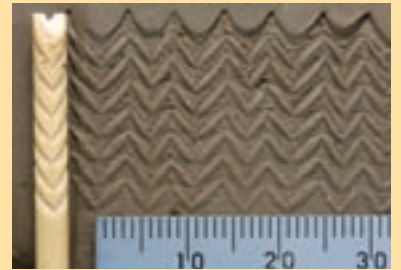
4

【縄文以外の回転文様】

縄文人は、「縄文原体」のほかにも様々な道具を使いました。

押し型文

彫刻した丸棒を回転して押しつけたものです。端を両面から斜めに切り、先端をくさび状にして、その形に合わせて彫刻すると山形になります。



押し型文



オオバコ文

オオバコ文

オオバコの穂を転がすと、組紐とよく似た文様ができます。北海道では縄文時代から見つかりますが、関東地方では弥生時代に少数あるだけです。

【縄文土器を調べて何が分かるの?】

縄文土器は作られた時期や地域によって「共通する特徴」を持っています。それは土器の形であったり、文様であったり、混ぜ物の場合もあります。私たちはそんな土器のまとまりに「●●式」という呼び名を付けており、その数は全国で500種類を超えています。

これら共通の土器を使う人たちは、何らかの繋がりがあったと考えられます。つまり、土器の広がりや移り変わりの様子を研究することで、記録のない時代の「土器の地図」や「土器の年表」ができて、縄文時代の社会生活を復元するうえで、大きな手がかりになるのです。たとえ縄文だけの付いた小さな破片でも、何時どの地域で作られたか分かる場合があるのです。

■ 埋蔵文化財活用のための基礎講座 ■

遺跡の発掘調査によって見つかった土器や石器などの埋蔵文化財は、私たちが暮らす地域で生活した人々の歴史や文化を知るうえで、大切な資料です。「埋蔵文化財活用のための基礎講座」は、こうした地域の生きた教材を学校教育や生涯学習の場で、積極的に活用していただくことを目的として、平成13年から毎年学校の夏休み期間中に実施しています。

今年度は、8月17日から19日までの三日間行われ、19名（のべ39名）の参加がありました。

● 講 義

旧石器時代から中世までの栃木県の時代概説6講義、埋蔵文化財センターと授業や生涯教育での土器や石器の活用の2講義、計8講義（1日目4講義、3日目4講義）を行いました。

時代概説では、図表や写真など最新の資料を用い説明を行い、当時使用していた土器や石器を目の前にして、作り方や使われ方など質問が活発にだされました。中世では、銭についての特別講義が行われましたが、身近なものでもあることから好評でした。

また、埋蔵文化財センター・土器などの出土遺物についての実際の活用例、特に出前授業についての説明を行いました。



● 実 習 (石器をつくる)

昨年好評だった石器作りを今年度も実施しました。製作当初は戸惑っていましたが、石鑿の予想以上の出来栄えに満足していました。



● 史跡見学

発掘体験に向かう途中、宇都宮市東部の県指定史跡笹塚古墳（古墳時代中期の県内最大級の前方後円墳）と当センターが確認調査を行い保存整備されている琴平塚古墳を見学しました。



● 発掘調査体験

市貝町助五郎内遺跡で発掘調査を体験しました。まず、調査中の竪穴住居跡を見学し、担当職員に住居の構造や坏や甕などの形のわかる土器がカマド周辺の床面から多く出土していることなど説明を受けました。

その後、発掘上の諸注意の説明を受け、慎重に掘り下げていきましたが、夕立もあり、上面の破片のみで、形のわかるような遺物の出土には至りませんでした。しかし、1,300年前の住居跡の埋土が予想以上に固く、発掘調査が根気の必要な仕事であることを実感したようです。猛暑の中、ご苦労さまでした。



● 特別講義

平成14年から4年間、当センターに出向され埋蔵文化財の発掘調査や整理作業に携わった佐野市立南中学校の馬場秀典教諭に「学校での埋蔵文化財の活用-出前授業の実践例から-」という演題で、受講者と同じ教師という立場からお話をして頂きました。

埋蔵文化財という地域の生きた教材と、考古学の専門知識や情報を豊富に持った人材を活用することにより、時代を実感させる力があること、生徒が興味をもつ授業形態の工夫など、多くのヒントを与えてくれました。



● 意見交換

最後に、受講者と普及事業担当職員により、今回の講座の感想や埋蔵文化財活用に関する意見交換を行いました。

近年、体験的学習の重要性、社会教育施設活用の必要性が高まっており、教科書の写真ではなく古代人が使った本物の土器に実際触れ、大きさや重さを実感できる埋蔵文化財センターへ期待する意見を頂きました。出前事業や社会科見学を実践するにあたっては、センターと教員との連携が重要であること、お互い何ができて何を求めているかなどの積極的な意見交換が必要なことを再確認しました。また、事前学習のためにも出前授業実施に係わるマニュアル作成を望む意見も出されました。

このほか埋蔵文化財センターの周知方法など、たくさんの貴重な意見を頂きました。今後の講座や普及事業に活用していきたいと思えます。



■ 埋蔵文化財担当者保存処理研修会 ■

保存処理研修会は、市町及び博物館・資料館の文化財担当者を対象に毎年6～7月に計4日間開催しています。内容は基礎研修と応用研修に分かれており、センター開所の平成3年より実施（応用研修は平成4年から）、今年度で20回目を迎えました。これまでの参加者はのべで基礎研修145名、応用研修（3日間）107名、今年度はそれぞれ12名と8名でした。

基礎研修では、文化財全般の保管についての講話を行い、応用研修では、主に埋蔵文化財（金属製品と土製品）の処理実務を行っています。金属製品研修では、X線撮影、錆落とし等をセンター設置の機器（県内で唯一）を使用しての研修が可能で、X線フィルム等の準備も要りません。この処理実務の特徴は、参加者が持参した文化財（各市町所有）で研修ができることであり、一度でも研修に参加すれば、申請書提出・日程調整は必要になりますが、埋蔵文化財センターでの保存処理作業が可能になります。

今年度は基礎研修参加者12名の内、初参加が11名を数え、研修会の必要性を再認識しました。



基礎研修（講話・研修室にて）



応用研修（土製品研修・保存処理室にて）

ロビー展示から

当センターが保管する遺物について、栃木県総合文化センターと埋蔵文化財センターのロビーで展示を行っています。近くにおいでの際はお立ち寄り下さい。

県内最古のネックレスの工房跡

真岡市市ノ塚遺跡では、古墳時代前期（4世紀）まで遡る県内最古の管玉の工房跡と考えられる竪穴住居跡が4軒発見されました。

工房跡の出土品からは、群馬県南部の三波川付近で採れる緑色凝灰岩を入手し、荒割りから整形・研磨・穿孔・完成品までの管玉の製作工程を理解することができます。また、管玉以外では、瑪瑙製の勾玉の未製品1点が出土しています。研磨に用いられた砥石も、未製品や破損品などとともに各住居跡から出土しており、据え置かれた状態のものもありました。

管玉や勾玉は、孔に紐を通して首飾り（ネックレス）としたものです。古墳などから出土する例が多く、権威を示すものとして地域の首長や有力者が付けていました。古墳時代初めの市ノ塚遺跡ではこの時期の住居跡が多く、東海地方西部や畿内に系譜の求められる土器とともに、鉄製の鎌や鋏、青銅製の鏡の破片なども出土しています。このことから、小貝川流域の水田開発のための中核的な集落であったと思われます。



管玉製作復元工程



埋蔵文化財センターロビー展示

埋蔵文化財センターの見学・体験学習・職場体験等のお申し込みは
ホームページ <http://www.maibun.or.jp> をご覧のうえ普及事業担当まで TEL 0285-44-8441

